

白選五十一首

残業は日々続きいてポケットに少女の名前の活字秘めつつ
 疲れ来し兆しに文選箱重し耳鳴り活字のつぶやきの如く
 限られし文選箱の大きさに「愛」という字を幾字か拾う
 刷り間違えし忌中はがきの束なども焚火にくべて温みつつおり
 金借りに行くべくバスを待つ間眠れる如く目を閉じていき
 枕辺に鏡を置くが慣いなり寝ねつつ淋しくおもうことあり
 曇硝子に変えねば寒し部屋内に寝ねつつ霜の原つばが見ゆ
 今川焼まもなく焼ける知らせにて雨の中少年と我と待ちおり
 あお向けに寝ながら闇を愛しおり動けば淋し自慰終えし後
 豚の交尾終わるまで見て戻り来し我に成人通知来ている
 なめらかに貝の内側光りおり文字閉じ込めて海に還さん

「望郷篇」



浜田康敬

歌集のこと、白選のこと

私はこれまで三冊の歌集を出している。ほかの歌人に比べて、これは極端に少ない。決して誉められたことではない。

最後の歌集は「旅人われは」で、以後すでに十五年が経っている。その後の作品を纏めて新しい歌集を出すべく用意はしているものの、どうにもまだ自分としては納得できない部分があつて踏ん切りがつかないのである。

ところで私の第一歌集「望郷篇」は、昭和四十九年秋に出版された。この「望郷篇」を出すときも同じような迷いがあつたのだが、それを吹っ切ってくれたのが、当時、反措定出版局の福島泰樹氏と、雁書館主富士田元彦氏の強い奨め、また両氏の強引な口説きで

わが過去に持ちし望みよ大きな船ありて船員の影暗く立つ

イヤホンを握りてゆけばささやける女の声が掌よりもれくる

銀行は扉閉ざして夜を待てり夜来ればわれと君の逢う場所

鉛筆をなめなめ次の逢う場所に丸つけて地図にわが愛を置く

カーテンの向こうに動く人影が妊みこもれる態に鍵閉めている

ひらがたと漢字に活字分けながら恋成りし小説の版こわしいる

この部屋から富士山見えおり干してあるストッキングを透かし見てみる

「死」をわざと「死」と誤植してそのままに刷りおり創刊号の詩の同人誌

肩書きの多き名刺を刷りいたり今日はこれだけの仕事しかなく

死者の棺の中へ一緒に入れて焼くわが写真はなるべく幼きときの

元日に母が犯されたる証し義姉は十月十日の生まれ

職探すことに疲れてユダヤ人虐殺の映画見て憩いおり

きみと並び写りいる写真の後方に物売る老婆も写りておりぬ

動くこと美しければチェロ奏きのチェロの高さにのどぼとけ見ゆ

髭を剃るために沸かせし湯の余りにコーヒー入れてひとり飲むなり

とびぬけてやさしき顔の少年がかくれあそびの鬼となりたる

終い湯にいつも来ている青年のまたたくましましきいれずみに会ふ

方形のガラスを運ぶ男いて透明をかくも重くかつげり

海の画像写りしテレビそのままの重さかかえて部屋隅に寄す

雪降りの夜をはしゃげる如くして人間殴り合うぞ路上に

「望郷篇」の解説を書いて下さった塚本邦雄氏のお陰であった。

歌集出版の話がそれまでないわけではなく特に富士田元彦氏からは矢の催促で、それを福島泰樹氏の反措定叢書さくしよで、と決まった時は、心底うれしかった。

反措定叢書とは、当時三枝昂之さくしよ、伊藤一彦氏等、新進の早稲田系歌人の歌集を主に出していたので、そういう意味での若干の戸惑いとまどいがなかったわけではないが、しかしそれを何よりも富士田元彦氏が喜んでくれたことが私にはうれしかった。

富士田元彦氏は、私が第七回角川短歌賞を受賞した時の雑誌「短歌」の編集長で、以後ずっとお付き合いを頂いているが、もし私が歌集を出す時は何としても富士田元彦氏の手で、というのが当時の私の思いであった。その願いが見事に適ったのである。

ところで、これまで私は何回か求めに応じた自選の作品を発表してきたが、しかしただか三冊の歌集しか持たない中からの自選作業であつてみれば、それはいつも同じ作品の羅列になつてしまふ。したがつて、今回のこの作品もご多分に漏れず、これまでの繰り返しとなつてしまつた。やはり早く、次の歌集を出すべき時期に来ていることは否めない。

(はまだ・やすゆき)

ガラス屋の切屑したたるばかりにてそのきらめきを捨ててに行きたる

わが生れし北海道を地図の上に見ているに雪降りかかるなり

ひとり田を掘り返しいる老婆いてしきり降る雪を土に埋めゆく

折り返し地点をマラソン選手等が徒勞の如く返り行くなり

となり家の火事にもらいし火の中に盛りの薔薇が木ごと燃えいる

かけ終えし巢にみずからをしぼし置き縛されし如蜘蛛は動かず

昼日なか暗き室^{へや}つくり星空を撮りし写真の現像はじむ

「旅人われは」

縛るため用ある紐が束なして縛られて荷となりて送らる

大掃除せる焚火にて来年の貰いすぎたる曆を燃やす

鉏路わが生まれし海辺啄木の碑^{いし}にあそびしうたにあそびし

われの名に一文字雪を録さんと「敬」という文字「ゆき」と訓^よまする

二三時間前に水張り終りたる田なかをすでに泳ぐ虫あり

火事現場煽るごとくに消防車猛々と来て水掛けはじむ

取り壊しされいる家の屋根裏が捲られて秘色めくもの現わる

北海道生れのわれが九州に住みておのれの墓を買いたり

兄弟は仲よくあそび空に揚げし凧に喧嘩をさせているなり

山陰線に浜田駅ありさらに一つ松江は母と同じ名なりき

「盗む」「刺す」「殺す」はたまた「憤死」する言葉生き生き野球しており

ガッツ石松かつてボクサーたりし頃われも生き生き生きおりたりし

「望郷篇以後」